

通信教育部メディアスクーリング  
経済学（2017年度撮影）

# 経済学

## （資本と利子から経済を考える）

### 第9回

法政大学 法学部

水野和夫

# 第9回目のテーマ

## ▶ グローバリゼーションの論争

．．． 転換派vs. 懐疑派

## ▶ 二つの軸

．．． 単一要因説vs. 複数要因説

# さらなる争点

「さらなる争点」(『グローバリゼーション』スティーガー、p.17～)

「共通の誤り」と「独善的な試み」(p20)

「どのグローバリゼーション研究者も、問題の現象の一つの重要な次元を正確に特定しており、一面では正しい。しかし、彼らに共通する誤りは、グローバリゼーションのように複雑な現象を自らの専門に合致した単一の領域に還元しようとする、独善的な試みにある。」

「還元主義対多次元的アプローチ」

「幸いにも、ますます多くの研究者がグローバリゼーションに対して、致命的な還元主義を回避した多次元的アプローチに留意し始めている。」

「グローバリゼーション懐疑派」と「グローバリゼーション誇張派」

「懐疑派の挑戦的な課題」(p.21-22)

**「グローバリゼーションとは本来的に近代の現象なのか、という問題である。」**

グローバリゼーション批判者はこの問にノーと答え、グローバリゼーション概念は歴史的に正確さを欠いた方法で適用されてきたと付け足すだろう。つまり、この思慮深い懐疑派のグループは、歴史を概観しただけでも、現代のグローバリゼーションがさして「新しい現象」ではないことがわかると主張する。

# グローバリゼーション論争・・・2つの軸

図 1.1 グローバリゼーション論争（要約）

単一因果的／一次元的説明		複数因果的／多次元的説明	
歴史的連続性	経済的・政治的・技術的变化の産物としてのグローバリゼーション	経済的・技術的・政治的諸力の産物としてのグローバリゼーション	懐疑派
	グローバリゼーションを限定、歴史的に独自のものではない	グローバリゼーションを主に政治とエコロジーに限定	
歴史的転換	経済的・政治的・技術的变化の産物としてのグローバリゼーション	経済的・技術的・政治的变化の結合の産物としてのグローバリゼーション	転換派
	現代のグローバリゼーションは歴史的に先例がない	現代のグローバリゼーションは歴史的に先例がない	

# グローバリゼーションは「ウエストファリアの神殿」を倒すか否か

『変容する民主主義 グローバル化の中で』(A. マッグルー【編】、1997原著、松下洸【監訳】、日本経済評論社、2003)

## 第1章 グローバリゼーションと領域民主主義

### 第2節 民主主義、国民国家、世界秩序

「神に見捨てられ、間違いじみた」平和的解決、p.3

**ローマ法王インノケンティウス10世**は、1648年の平和的解決—それはヨーロッパの30年戦争を終わらせた—の詳細を知った時、腹立たしげに非難した。「[ウエストファリア条約]は、**法律上無効で、不公正で、いまわしく、神に見捨てられて、間違いじみており、永久に意味と効力を欠いている**」と。

この「**神に見捨てられ、間違いじみた**」平和解決は、すでに近代国際秩序の規範的基盤とみなされている。

なぜなら、ウエストファリア条約は、「別々の、疑似独立的な領域単位は、社会・政治生活の基礎単位であると見なす世界観を促進した」からである。

# ウェストファリア秩序4つの中心的原理

## － ①領域性、②主権性

ひとつの絶対的なキリスト教王国としての西ヨーロッパの中世観  
vs. ウェストファリア秩序

ひとつの絶対的なキリスト教王国としての西ヨーロッパの中世観に対して、**ウェストファリア秩序は一組の新しい規範的原理を体系化した。**

その原理の上に、国際的国家システムが構築された。この原理は、政治的風景の本来の特徴のように思えるほど、いまや近代社会生活ではありふれている。

ウェストファリア世界秩序、  
p.5

### ウェストファリア秩序の4つの中心的原理

- 1 領域性 諸国家はその司法管轄権および政治的権威の範囲を限定する固定した領域的境界を有する。  
すなわち、**人類は固定的かつ排他的な領域空間という点で定められた政治単位に分割される。**
- 2 主権性 その究極的な権威は、「二つの異なる権威が同一領域への主権を同時に有することはない」という点で分割できない。



# ウェストファリア秩序4つの中心的原理

## － ③自律性、④合法性

ナショナリズム	3 自律性	<u>国家だけが対外的干渉や支配を決定し、またそうした干渉や支配に制約されない資格があるという意味で、</u> 国家には自国の国内的・対外的諸問題の対処する権限が与えられている。
	4 合法性	主権国家間の関係は国際法に従属する。しかし、このことは、各国が同意する限りにおいてである。 国家より上位の法的権威は存在しない。
		近代国家と近代国家間システムは最近300年にわたる同時代的関係のなかで発展してきた。
		19世紀と20世紀におけるナショナリズムの成長は、近代国家と近代の国際的国家システムの強化に重大な貢献をした。 →[創造の共同体](ベネディクト・アンダーソン)

# リベラル・デモクラシーの基本原則＝領域的国民国家の諸制度

ウエストファリア秩序と領域的民主主義、p.6

民主的政治の領域化

ウエストファリアの神殿

リベラル・デモクラシーは「村落、種族、あるいは都市国家の単なる民主主義ではない。それは国民国家の民主主義であり、その出現は国民国家の発展と結びついている。

今日、リベラル・デモクラシーの基本原則と定義—デモス（人民）の性質、民主的市民権の定義、自治の理念、同意、代表制、人民主権—は、主権を持つ領域的国民国家の諸制度とほぼ全面的の結びついている。

この「民主的政治の領域化」はウエストファリア的規範と諸原則に基づいた世界秩序の上に想定されている。

しかし、もしその世界秩序と主権国家体制がもはや考えられたほどに「確固たるもの」ではなく、不変なものでないならばどうなるのだろうか。

もし、グローバリゼーションが、「ウエストファリアの神殿」が建つ基盤や政治的原則に挑戦しているなら、どうなるのだろうか。その時、自由民主主義的な政体にとって潜在的帰結は何か。



# 2つの知的断層線—①主因の変遷

グローバリ  
ゼーション論  
争、p.12

主因の変遷  
(p.13)

今日のグローバリゼーションの特徴とは、それが帝国や個々の文明から成る世界ではなく、国民国家の世界、すなわちウェストファリア世界秩序の中で展開していることである。

この論争は、広範で理論が多様という特徴がある。  
しかし、主に2つの知的断層線があり、

① 第1は、主因の変遷という「断層線」である。

主にグローバリゼーションを単一の原因に求めるか複数の原因の求めるかにある。

**単一のプロセス**・・・資本主義、技術的变化、もしくは帝国主義によって推進。

**多次元のプロセス**・・・いくつかの相互に関連した原因(たとえば、技術的、経済的、文化的、政治的变化)からなる。

# 2つの知的断層線―②連続性と変化の問題

連続性か変化か

② 第2の「断層線」は連続性と変化の問題にかかわっている。

**転換派**・・・グローバリゼーションの現段階は過去と全く断絶しており、グローバルな政治経済の転換、もしくは再構築を形成していると論ずる。

**懐疑派**・・・断絶ではなく、歴史的連続性を示しており、歴史的先例もある。

## 《転換派の主張》

現代のグローバリゼーションは、ウェストファリア秩序が構築されている主権国家から成る制度を根本的に危うくしているという筋の通った確信が、「転換派」の主張の核にある。

なぜなら、「グローバル化した」世界において、政府がもはや自身の国境内で生じていることをコントロールできないほど、領域的境界はますます穴だらけになっているのである。

それゆえ、この説明では、グローバリゼーションは、ウェストファリア秩序の浸食もしくは転換と結びつけられている。

# 転換派 ・ ・ ・ ポスト・ウェストファリア秩序

ポスト・ウェストファリア秩序、p.15

実際、「転換派」の主張は、グローバリゼーションが主権を持つ領域的国民国家のウェストファリア秩序の浸食と結びつけられているだけでなく、グローバルな支配における経済的・政治的組織の新しい非領域的諸形態の出現、たとえば多国籍企業やトランスナショナルな社会運動にも結びつけられている。

この意味で、出現しつつある世界秩序はもはや純粹には国家中心的不是なポスト・ウェストファリア秩序である。

グローバリゼーションは国内と外国、つまり国民的事であることと国際的事であること、国家の内側と外側との境界をそれぞれ浸食している。

# 「ウェストファリアの神殿」の崩壊

「ウェストファ  
リアの神殿」  
の崩壊、p.15

こうして、イギリスの発電はノルウェーやスウェーデンの森林を破壊する酸性雨の一因となっている。すなわち、国内問題であると同時に国際問題でもあり、国内と国外の区別は行政上の意味を持つにすぎない。

この点で、国家はもはや自国の領域内で起こっていることに対して唯一の支配権を保持していない。

そのため、グローバリゼーションは、「ウェストファリアの神殿の柱」を破壊している、と転換派は論じる。

# 懐疑派の主張・・・国家の重要性が増加

ヘゲモニー的  
大国の政策  
の一産物  
p.15-16

## 《懐疑派の主張》

「転換派」の主張は誇張とみなす。

懐疑派は、グローバリゼーションやリージョナリゼーションが、新しい国家中心적ではない世界秩序の出現をどの程度前もって示すものなのかについて強い留保を共有している。

懐疑派は、国家を流動的でなくなっていると見なすどころか、グローバリゼーションのプロセスを調整し、促進する点で国家の重要性が増したと指摘。

さらに、グローバリゼーションは、19世紀のイギリスや20世紀のアメリカのように、自由な(自由貿易の)開放的経済に向けての必要条件を創出するためのヘゲモニー的大国の政策の一産物である、と論じる者もいる(Gilpin, 1987)。